《新刊紹介》

# 近代国語教育史

高森邦明 著

わたしは、本書を机辺において国語教育史についての辞書がわりに使ってきた。たとえば、国民科国語について知りたい時には、目次を手がかりに、三一七頁から読めばよいし、寒川道夫について知りたい時には、人名索引を手がかりに二〇三頁と四二〇頁を開けばよいのである。そこには確実な史料に基づく的確な説明がある。本書は、国語教育史を学ぶための座右の書であるとともに、国語教育史上の事項を知るための座右の書でもある。

これまでにも、飛田多喜雄氏の『国語教育方法論史』(一九六五年)、山根安太郎先生の『国語教育史研究』(一九六六年)、野地潤家先生の『国語教育通史』(一九七四年)などの労作がまとめられているが、本書はそれらを受けて、江戸末期から一九七七年までの約一五〇年間の国語教育をつぶさに記述した浩瀚な書物であるところに特色がある。

その概要は次のとおりである。

序説　国語教育史研究の意義と時代把握の立場
第一章　学制期の国語教育
第二章　初期の国語教育論
第三章　近代国語教育の確立
第四章　明治後期の国語教育
第五章　大正新教育と作文教育の革新
第六章　読み方教育の深化
第七章　昭和前期の時代相と国語教育
第八章　戦後の新国語教育の発足
第九章　戦後国語教育の発展
第十章　最近十年の国語教育

歴史記述の方法としては、著者は山根先生から多くを学んで実証方法を駆使している。恣意的な記述を排しているという意味で安心して読める。また、本書は時代相・国語教育思潮・国語教育行政・教科書・実践史等のすべてに目くばりをして「国語科教育の領域を広く包む意図」(あとがき)を実現している。とりわけ、著者の前任地である富山地方の国語教育史に関する知見と資料を全面的に活用している点は異彩を放っている。地方国語教育史の視点を加えることによって先進的な理論が日本各地の実際の現場ではどう受けとめられ生かされていたかという具体相を明らかにすることに成功しているからである。

内容については、初期の国語教育論、垣内松三「実践の技術学」の評価、峯地光重の国語教育論の進歩性、倉沢栄吉の読解指導論など、それぞれに著者の新見と新しい位置づけが見られ、教えられるところが多かった。

最後に、本書を読んで感じた疑問を一つ書いておきたい。それは、著者は『近代国語教育史』の「近代」をどのように考えておられるのであろうかということである。近代が物理的な時間の長さを意味するのではなく、その内質によって規定されるものとするならば、国語教育における「近代とは」という問いかけが望まれるのではなかろうか。

たとえば、著者は、「明治以後の国家体制

が庶民教育の上に負わしていた課題を国語教育がいかにになない」（序説）と記しているが、近代教育の内質には、国家の教育要求が規定した面と「文字を習いたい、本が読めるようになりたい」等の国民の教育要求が規定した面があるはずである。この国民の国語教育要求とその実現への過程を歴史として把握する必要があるのではなかろうか。

近代は民主主義をめざす時代でもあるが、そうとするならば、民衆の思想表明と伝達の方法を開発していく話しことば教育の歴史へはもっと注目することが必要であろう。

著者は第十章において「人間育成の総合的な機能を回復」することの必要性を説いている。自己を表現させたり言語文化に触れさせたりすることをとおしてこの人間性をめざめさせることこそ近代国語教育の本質ではなかったか。この視点からの史実の検討は不十分にしかなされていないように思われた。その一例として、「ことばを育て、人間を育てる」ことを目標として高い実践を達成された大村はま氏の仕事を位置づける試みがなされていないことを指摘できよう。

いまや世をあげて軍備強化の時代へと進んでいる。国語教育も、戦後の技術主義から愛国心の教育をめざす内容主義へと変貌するやもしれない。著者は、第四期国定国語教科書について、「超国家主義、軍国主義への傾向をはらむものとして、危険な特色を示してもいた」と教科書の軍国主義化を危険と見なしている。今後もこのような健全な国語教育史観が共通に維持されることを顧って擱筆する。

（A五判五〇六ページ、昭和五四年一〇月、鳩の森書房刊　七、五〇〇円）

（一九八二・五・六）　（浜本　純逸）